

分離のダイナミクス： 危機、移行、自己啓発

ピエール・タップ¹

JEFETグループとRichard

Cloutier教授に、「親離れ：誰のための利益か、誰のための損失か」というテーマで会議に招待していただいたことに感謝します。私は、専門的に夫婦別姓や離婚の専門家ではないことを明記しておきます。しかし、一方で私は、3人の子供が25歳から30歳の時に、51歳で13年以上離婚しているので、このような逆説的な状況は、いくつも例を挙げることができるだろう。ある同僚の話ですが、2度目の結婚の後、元妻は2度目の妻の元夫と結婚したそうです。2組のカップルは大の仲良し！？しかし、Cloutier、Filion、Timmermans²が指摘するように、別居や離婚が親夫婦だけでなく（あるいは特に？）子どもたちにも深刻な困難をもたらすことが多いのは事実である。打ち明け話については、私の目的に役立つものに限定して、この辺にしておきます。

別居や離婚がもたらす困難

¹ トゥールーズ・ル・ミライユ大学教授、発達と健康の社会心理学研究室（PSDS）室長。

² Cloutier, R., Filion L. & Timmermans, H. (2001) *Les parents se séparent*. 危機を生き抜くために、そして息子を助けるために。モントリオール大学サント・ジュスティーヌ病院。

コミュニケーション・ケベック（貴国 市民関係・移民省）が発行したパンフレットを大変興味深く読ませていただきました³

。エスカレーターを上る父親がよそ見をし、エスカレーターを下る母親が目の中の娘を見て、すでに下りた娘はまっすぐ前を見ているという、離婚を象徴するような面白いドキュメントが表紙になっています。

また、この報道は当然ながら情報の必要性を強調しているが、同時に「知っておくべきこと」という合理性も促そうとしていることに注目したい。表紙も当然、情報の必要性を強調しているが、「知っておくべきこと」「ちょっと考えてみて」など、合理性をアピールしたい。一方、危機、別居、離婚の生き方には、明らかに非合理的な側面が存在する。

このイメージは、統計によると、子供を産むのは母親であることを象徴的に示しています。父親が見て見ぬふりをしたり、面会交流の権利を分散させたり……。離婚すると、以前の家庭環境と比較して、母親が経済的に不利になるケースが多くなります。父親が上がれば母親が下がる（！）これは統計的にそうなっているだけです。

参照した文書の序文では、まず、別居時に夫婦が経験する「激しい感情」、特に夫婦に子供がいる場合に強調されている。"家族の再編成の影響は、心理的、感情的、身体的、社会的、経済的なレベルで破壊的であることが多い。そして、リソース、法的、経済的支援の重要性に重点を置いています。コミュニケーション・ケベックの文書では、心理社会的資源（3p.）、法的資源（34p.）、財政・金融的資源（10p.）の3種類の資源が同様に必要であるとしています。しかし、それぞれのタイプのリソースに確保されたページ数が不釣り合いであることは注目に値します。治療、相互扶助、支援の三部作に基づく心理社会的資源

³ Separation and Divorce」ガイドは、インターネット上で入手可能です：
www.comm-qc.gouv.qc.ca/guides_divorce.html

は、経験した状況や個人的・関係的特性の多様性という、提示と管理が困難な多様性を導入するのは事実である。

しかし、離婚の利益と損失について考えることは、当事者である父親、母親、子どもがどのように資源を管理し、支援や保護の恩恵を受け、また制約に反応し、リスクを取るか取らないかを分析することである。しかし、そのような状況で最も弱い立場にあるはずの子どもたちが発言することはほとんどありません。

しかし、財源と子どもの脆弱性の因果関係については、議論の余地がある。例えば、カナダの人材開発センターは、「収入よりも子育てのやり方が重要である」ことを示しました。著者ら⁴

は、家庭の収入、親の資源、地域の資源、家庭の特徴などを判断材料とする様々な要素を考慮した。彼らはこれらの要因を脆弱性指数⁵

と比較した。その結果、すべての年齢層の子どもにとって、効果的でない子育てが脆弱性に影響を与える最も重要な要因であることがわかりました。6歳以下の子どもについては、所得が脆弱性に与える影響がより明確である。6歳から11歳の子どもの脆弱性には影響を及ぼさない。さまざまな状況を考慮した結果、ひとり親家庭の子どもの大部分は、ふたり親家庭の子どもよりも発達上の問題を抱えやすいわけではないことがわかった。この大きな差は、全体として、ひとり親家庭の子どもという小さなサブグループに起因するものである。また、研究者は、「ひとり親家庭の所得に差がないことから、脆弱性と所得の統計的な関連性は弱い。⁶

⁴Canadian Council on Social DevelopmentのDavid Ross、Paul Roberts、Katherine Scott。

⁵これらの指標は、健康状態、行動、情緒的問題、学業成績などに基づいています。

⁶<http://www.hrdc-drhc.gc.ca>

離婚関連のウェブサイトは、（経済的および／または関係的に）困難な状況にある父親が、自分たちの権利を守るために作成することが多い。⁷。

"前妻がヴァンデに移住することになったんです。彼女は新しい王子様を見つけたのです。マダムは荷物をまとめ、カサンドラとセバスチャン（私たちの2人の子供）を連れて、皆に別れを告げました。私は怒り心頭でした。私は何よりも子供を愛していますし、このように子供を取り上げることで、以前のように頻繁に会えなくなると思ったのです。そんな旅行ができるわけもなく、買ったばかりの新車は元妻に預けられ、クレジット（他3件）も私が払い続けている状態です。元妻に（電話で）「ローンを払い終える間、子供を預けることはできないか」と相談する。数日後、元夫から手紙が届き、さらに元夫の弁護士から「連休明けに子供を返さないと訴えるぞ」という脅迫が！⁸

「なぜ、父親という概念を母親よりも重要視しないようになったのでしょうか？なぜ、母親が自分の意志で、子どもの実の父親を自分の選んだ他の父親と取り替えたり、子どもの人生から父親を完全に排除したりできる世の中になってしまったのだろうか。⁹

しかし、経済的、行政的、人間関係的、心理的な様々な困難に直面し、母子家庭の編成を余儀なくされている母親の状況も忘れてはならない。フランスでもケベック州でも、ひとり親家庭の状況の変遷は詳細に研究されている。

フランスでは、1999年の国勢調査（¹⁰

）で、ひとり親家庭の増加だけでなく、単身者の増加も分析している。「全体として、女性のひとり暮らしは男性よりも多いが（300万人に対して440万人）、その差は縮小傾向にあり、年齢によっても異なる。30歳から50歳の間では、男性が女性よりも多く、離婚や別居後に85%のケースで女性が子どもの親権を持っているため、こうした状況である」。一

⁷cf. 特にSOSパパ協会: <http://www.sospapa.net>; またはSOS離婚協会: <http://www.sos-divorce.org>

⁸ divorce online: <http://perso.wanadoo.fr/pcsb/>

⁹<http://www.geocities.com/childrenanddivorce/f/>

¹⁰Le Monde 050701のレポートを [ご覧下さい](http://www.lemonde.fr/article/0,5987,3226--205396-00.html)。 <http://www.lemonde.fr/article/0,5987,3226--205396-00.html>。

方、50歳以降は、女性の方が長生きするため、女性が男性を上回ります。女性の社会的地位が高いほど一人暮らしの確率が高く、女性管理職の21%が一人暮らしをしています。男性の場合、社会的カテゴリー間の格差は小さくなっています。

ひとり親家庭は「強く」伸びており、1990年と比較して22%増。しかし、この増加率は鈍化傾向にあり、1982年から1990年にかけては40%に達していた。INSEEの人口統計部門を率いるGuy

Desplanquesは、「離婚や別居の急増の影響は吸収され、今も増加しているが、そのスピードは緩やかになっている」と説明する。片親の家庭は175万世帯あり、その中で15歳以下の子どもの13%が育てられている（1990年は9%）。このような家庭の88%は女性が世帯主となっています。女性は親権を持つことが多く、別居や離婚後に家庭に戻る可能性は男性よりも低いのです。

ケベック州単親家庭・複合家庭連合（FAFMRQ）：経済的、心理的、法的、社会的な多くの問題に直面し、単親家庭と複合家庭は連帯を示す必要性を感じていると述べています。こうして、ケベック州には数多くの協会が誕生した。現在、FAFMRQにはケベック州のすべての地域から約60の協会が加盟しています。¹¹

一方、ラバルの単親家庭・複合家庭グループ（RFMRL）は、子供の有無にかかわらず、別居、離婚、夫婦関係に悩む女性に道を開いている。その目的は、このような人たちが分離した状態を把握し、自分や子どもたちの生活を再編成できるような態度や行動を身につけるための場所を提供することです。また、同協会では、別居が子どもに与える影響や影響を理解したい男女を対象にした「家族教育プログラム」も実施しています。このプログラムの目的は、彼らが新しい状況に適応するのを助けることですが、何よりも、家族という

¹¹<http://www.cam.org/~fafmrq/> .

単位の崩壊をもたらす大きな変化の中で、子どもたちがよりよく生きられるようにすることが大切です。¹²

全国福祉協議会¹³

は、『貧困プロファイル1999』において、貧困と独身女性や一人親家庭の状況との関係进行分析している。「1999年には、490万人のカナダ人が貧困状態にあった。一般に信じられていることとは異なり、相当数のひとり親家庭の存在は、今に始まったことではありません。カナダの世帯主が女性一人の割合は、1941年には9%、1981年には9.3%であった。しかし、このほぼ同じ割合には、重要な進展が隠されています。

1941年当時、シングルマザーのほとんどは未亡人であった。

その後、若い夫が病気や戦争で亡くなることが少なくなると、母子家庭の割合は減少し、1961年には6.6%となった。

その後、夫婦別姓や婚外子の増加により、一人親家庭は増加の一途をたどっている。

1986年には、女性一人の世帯の割合が10.4%まで上昇し、その内訳は次の通りである。

このうち58%が別居または離婚しており、27%が未亡人、15%が独身であった。

断捨離と自己啓発

別居の問題は、今日私たちが議論している制度的なプロセス（夫婦や親の別居-離婚）をはるかに超えているのです。もちろん、夫婦の別居や離婚は社会の事実となっている。したがって、今日、その激増を招いた歴史的、経済的、社会的、文化的な原因を最小化してはならないのです。一人一人が人生を通じて他者との関わり方を発展させていく

¹²<http://w2.lavalnet.qc.ca/rfmrl/>

¹³<http://www.ncwcnbes.net>

方法を議論することは、経済的・社会的な原因を否定して離婚を「心理学的に」解明することを意味しない。¹⁴むしろ、個人的な原因が、行政、財政、法律などの集団的な原因とどのように結びついているのか、よりよい形で相互構造化されているのかを分析することが重要なのである。もちろん、公共サービスがこうした個人的な側面を考慮することが難しく、権利と可能性の管理に基づいた行政、財政、法律上のサービスに限定したいと考えるのは理解できる。そして、問題の個人的な側面は、ソーシャルワーカーや心理学者、精神科医に紹介されます。この紹介は、時には傍観者として.....経験することもあります。その人は「病気」と感じているわけではなく、経済的、社会的な支援だけでなく、精神的、道徳的な支援も必要としているのです。共感、人間関係の専門家だけでなく、対話の必要性を感じたり感じなかったりする人々で構成される「一般の人々」と接触するすべての人々にとって、「世界で最もよく共有されるもの」¹⁵

でなければならない。彼らは、自分の問題の管理を助けてもらいながら、これらの問題が引き起こす感情を制御したり流したりする努力もしなければならない。

そして、私たち一人ひとりが子供の頃から経験してきた分離や衝突が、今日の私たちの危機管理、夫婦の分離や離婚の仕方（個人的にも集団的にも）に影響を与えているかどうかを自問する必要があるのです。これは、生涯を通じて経験される分離の存在と影響だけでなく、認知、感情、関係の各レベルで、各人の個人的発達における分離の機能を分析することであり、その人が自分のスタイルを通して行動し自己主張する行動や態度、特にストレスや屈辱感、排除感を引き起こす状況に反応し、協調的・対立的・敵対的に他者と交流することと関連しているのです。そこで、人生の中で経験するさまざまな別れの場面で、

¹⁴ cf. Baubion-Broye, A., Malrieu, P. & Tap, P. (1987) L'interstructuration du sujet et des institutions. *Bulletin de psychologie*, Tome XL, n° 379, 435-447 ; cf also Tap, P. (1988) *La Société Pygmalion. Intégration sociale et réalisation de la personne*, Paris, Dunod (chapter 4: l'interstructuration du sujet et des institutions).

その人が経験する損得は何かと問いかけながら、コロキアの問題を簡単に取り上げてみます

最初に言っておきたいことがあります。その人は、客観的または客観視可能な特徴に限定されるものではありません。ハーバマスが¹⁶

で示したように、人間は必然的に、客観的、主観的、規範的という3つのシステムの一部分となるのである。個人、夫婦、家族、あるいはもっと広い意味での社会の危機に際して、この3つのシステムは解離し、互いに対立し、あるいは逆に誤って融合する傾向がある。客観的な事実、主観的かつ規範的に解釈される。したがって、利益と損失、リスクと保護は、それぞれの主人公が生きた事実に与える意味に従って評価されることになる。これらの事実、主観的な解釈によって、また、主体が採用する多かれ少なかれ意識的な意味体系や文化的参照（規範や価値）によって、方向づけられ、歪められ、捕えられ、拒否される。自分の権利を守るための闘いは、性別、社会的地位、経済的手段などによるが、個人の態度や他者、あるいは他人とのコミュニケーションの様式によるものであろう。困難な状況に対処するための戦略は、知識やスキルだけに依存するものではありません。また、「存在する力」「実行する力」だけでなく、「なる力」「プロジェクトを開発し、それを達成しようとする能力」にも依存します。

15

デカルトは「常識は世界で最も広く共有されているものだ」と主張した。これは常識にも共感にも当てはまらないかもしれないが、それらを拡張することは皆の利益になるのだ

16 ハーバーマス J. (1987)

M. C. Saint-JacquesとC. Parentによる「*La famille recomposée*」の本です。¹⁷また、R. Cloutier, L. Filion, H. Timmermansの*Les parents se séparent*に関する本もあります。Cloutier, L. Filion and H. Timmermans on *Les parents se séparent...*¹⁸

は、親の危機的状況において必要な適応の重要性を明確に示しています。人は自分の人生を作り直すのではない、続けるのだ」という表現は、親にとっても子供にとっても、個人のアイデンティティ（私は誰なのか）が、分離や衝突に意味を与え、時には価値さえ与えることを必然的に意味する、という事実と関係があるのです。しかし、このどこか「作られた」自己の歴史的連続性は、見事に孤立して達成されているわけではない。私は、コミュニケーションをとり、つながりを築き、愛すると同時に愛され、他者の特殊性（態度、信念、プロジェクトなど）を認識すると同時に、自分の特殊性を認識する必要があるのです。離婚した人は配偶者を変えるかもしれないし、職業や選挙で選ばれた地域や国などを変えるかもしれない、自分自身のあり方も変えたいと思うかもしれない。離婚した人は、配偶者が変わるかもしれないし、職業や選挙で選ばれた地域や国などが変わるかもしれませんが、自分という人間を変えたいと思うかもしれません。

これまで見てきたように、引っ越しは、離婚した親がしばしば繰り広げる奇妙な戦争における重要な武器である。しかし、アイデンティティは、アンカリング（アイデンティティの領域）とアタッチメント（愛情や友情のネットワーク）を意味する。対立があると、ショペンハウアーがヤマアラシのたとえで示した最適な距離感（近すぎず遠すぎず）を見つ

¹⁷ Saint-Jacques, M. C. & Parent, C. (2002) *La famille recomposée: Une famille composée sur un différent*, Montreal, Quebec, ed. de l'Hôpital Sainte-Justine (CHU Mère - enfant).

¹⁸ Cloutier, R., Filion L. & Timmermans, H. (2001) *Les parents se séparent*. 危機を生き抜くために、そして息子を助けるために。モントリオール大学サント・ジュスティーヌ病院。

けることが難しくなる¹⁹

。子供も親と同じように、最低限の安定と継続が必要です。離婚後、片親家庭や混合家庭の場合、一人ひとりがありのままの自分であること、また、なりたい自分になることが必要です。しかし、私たちは生活の乱れにどう対処すればいいのでしょうか。最も一般的な方法は、何が起こったのかを理解し、*破裂を移行に変換*することです。

トランジション、トランザクション、レジリエンス

トランジションという言葉は、しばしばチェンジの単純な対義語として使われることがあります。しかし、それは旅の連続の中で、ある種の変化を意味する。ラテン語の*transire*（死ぬ）が語源で、生から死への通過点である苦悩を連想させたのが始まりである。今日、移行を促進するということは、幸いなことに、より一般的な方法で、断絶を避け、より継続的かつ柔軟な方法で危機に対処し、関係を維持しながら、関係を変換し、別の意味を持たせることを意味します。これでは、共働き関係を理解することはできないのでは？

"共通の子供がいる元配偶者は、別れた後、どこまで協力すべきなのか？²⁰これはパラドックスで、破局は夫婦関係に終止符を打つが、親の役割をなくすわけではない。私たちは生涯、父親か母親であり、「子は別れない」。ですから、私たちは関係を続けなければなりません、その種類を変え、絆を維持しながらも、もはや元配偶者の愛や性的なものに基づいたものではないのです。"共同養育の課題は、夫婦関係以外の基盤で、元配偶者間の機能的な支援関係を構築し、敵意や懸念の表現は適応に不利になるため、最小限に抑えること"²¹

したがって、共同育児は、状態A（過去→離婚）から状態B（一人親方または再構成または

¹⁹

真冬のヤマアラシは、互いに近づこうとするが、怪我をしたり噛まれたりして、寒さ（と孤独！）に耐えかねて離れていく。また近づいて.....と繰り返して、ちょうどいい距離感を見つけると.....最適！？

²⁰ Cloutier, R. (2001) La coparentalité in Cloutier, Filion and Timmermans *Les parents se séparent...* op.cit. 71-89.

²¹ Cloutier, op.86.

孤独）への移動と通過（プロセス）として認識される場合、移行を促進することができます。いずれにせよ、移行はコミュニケーションと組織の効率を向上させるための取引が行われる場合にのみ可能であり、どんな取引であっても、全員が納得する妥協が必要です。²²

しかし、元配偶者とその子どもたちの適応に大きな違いがあることを、どのように説明したらよいのでしょうか。変化を管理し、移行を促進する方法について、どのように説明したらよいのでしょうか。ひとり親家庭の子どもたちの中には、新しい生活環境や生活環境にあまり支障をきたしていないように見える子もかなりいることがわかった。

この見かけ上の脆弱性の低さを説明するために、レジリエンスという概念が用いられている²³

。この概念は流行しつつあるが、正確な定義が必要である。ここでまた、ラテン語の語源を引いて、2つの定義を提案することができる。

- レジリエンスがあるということは、まず衝撃の影響を打ち消すことができるということである（*resilientia* = *resilience*, *cancellation*参照）。それゆえ、「持ちこたえる」という表現は、レジリエンスと結びついている。時には（事実や状況の現実を）否定することが有効な場合もあります。否定や距離を置くことで「持ちこたえる」ことは、流動的な移行であると言える。断絶はそのように経験されず、対立は認識されないか、認識さ

22

ハーバマスの言葉で言えば、共同育児は、道具的・意図的な理由（効率性、合理性など）とコミュニケーション的な理由（仲が良い、話が合う、敵意が少ないなど）を明確にすることからなるので、難しい運動なのである。このアーティキュレーションへの取り組みは、4人に1人の親しかしていない。

²³ レジリエンスについては、Cyrulnik, B. (1999) *Un merveilleux malheur*を参照。Paris, ed. O. Jacob; Cyrulnik, B. (1998) (ed.) *Ces enfants qui tiennent le coup*.マルセイユ, Hommes et Perspectives.Vinay, A., Esparbès-Pistre, S. and Tap, P. (2000) *Attachement et stratégies de coping chez l'individu résilient*. (愛着と対処のストラテジー、個人のレジリエンス)。また、このような場合にも、「家族教育」の重要性を再認識することができる。Rutter M. (1996) *Stress, risk and resilience in children and adolescents: processes, mechanisms and interventions*.Cambridge: Cambridge University Press.多くの著者は、大人と同様に子供にも適用される不死身の幻想的な性質を示している。人間には誰でもアキレス腱がある。

れても人を不安定にしない。しかし、これは見かけだけかもしれません。「持ちこたえる」ことに関わる保持が、内面的な困難を引き起こすかもしれないし、その困難は、時間をかけて少しずつ、消耗によって先送りされるかもしれないのです。

- しかし、レジリエンスの第二の定義（動詞*resilire*と連動）が使われており、より楽観的？

より現実的？ここでは、つらい転機を語ることができる。別れとその影響は否定されないが、その人は「坂道を戻る」、鬱や敵意と戦う、軌道に乗る、「正しい足取りで再出発する」、などであろう。

Vanistendael

が指摘するように²⁴

、レジリエンスとは、いずれにせよ、「通常はネガティブな結果をもたらす深刻なリスクを伴うストレスや逆境にもかかわらず、社会的に受け入れられる方法で、成功し、前向きに生き、発展する能力」と関連するものです。

しかし、このレジリエンス能力はどこから来るのか、逆に言えば、困難な状況に対する脆弱性はどこから来るのか。この「なるための鍵」は、過去に、遺伝子や気質にあるのだろうか。さらに、愛することの難しさは、幼少期から来るものなののでしょうか？母親への愛着、そしてその愛着を経験し反応する方法が、愛することの難しさ、他人（兄弟姉妹、配偶者、子供、上司や部下など）との関係管理の難しさの原因になっているのでしょうか。

しかし、母親への愛着を制限することはできるのでしょうか？父親はどうする？今日語られている社会の絆の多様性とその「ゆるみ」についてはどうだろうか。人間関係を「保つ」ことの難しさについてはどうでしょうか。

²⁴ Vanistendael, S. (1998) *Keys to becoming:*

Resilience. レ・ヴァンドレディ・ドゥ・シャトーヴァロン。国際カトリック子ども局、ジュネーブ p.9

愛着：安全なアンカーリングからエンパワメントのための探索へ²⁵

危機的で不安定な状況では、その人は年齢に関係なく、*zones of anchorage*²⁶ , *zones of anchorage*²⁷

を必要とします。ゾーンという概念は、一人ひとりが自由な空間、つまりアイデンティティの安定と充実を促す自分自身のテリトリーを持つことの必要性をここで明確に示しています。しかし、アイデンティティの空間化は、そのまま他者との関連性を持っている。それは、私の固定された空間を構成する他者であり、それ故に愛着の対象でもある。しかし、ウィニコットが正しく示したように、²⁸

、主要な課題は、母親からの分離を受け入れる子どもの能力である。まず、移行オブジェクト（愛着像の存在の代替物）²⁹

、次に移行、個人内（精神または行動）、対人、さらに広くは文化・異文化間の空間を利用することになる。したがって、移行とは、不在や分離を、他者や自分自身の喪失として経験することなく、管理する能力として現れるのである。

愛着は、愛されること、社会的に支えられること、相手を愛したり助けたりする能力など、さまざまな形で関連づけられます。しかし、それはまず第一に安全保障の必要性につながっています。Ainsworth³⁰

によれば、愛着者（母親など）は安全な基盤を提供する。愛着者との関係の経緯によって

²⁵ 詳しくは、Tap, P. and Vinay, A. (2000) *Dynamique des relations familiales et développement personnel à l'adolescence* in J.P. Pourtois and H. Desmet *Le parent éducateur*, Paris, PUF; Vinay, A., Esparbès-Pistre, S. and Tap, P. (2000) op.cit.

²⁶ Lemay, M. (1998) *Resisting: role of affective and family determinants*. Bで。Cyrulnik (ed.) *Ces enfants qui tiennent le coup*, 27-43. マルセイユ、Hommes et perspectives.

²⁷ Baubion-Broye, A., Malrieu, P. & Tap, P. (1987) *L'interstructuration du sujet et des institutions*. *Bulletin de psychologie*, Tome XL, n° 379, 435-447. アンカーリング（個人的なニーズとの関連）は、ポジティブな側面（正当化、奨励、学習スペース、柔軟なコントロール）またはネガティブな側面（厳格な規範的圧力、自律性を制限する禁止事項など）において、明らかに社会的・文化的コントロールと関連しています。

²⁸ Winnicott, D.W. (1975) *The Child and the External World*. *Le développement des relations*, Paris, Payot.

²⁹ 赤ちゃんが分離に耐えられるのは、5ヶ月目以降、母親のイメージを記憶しておくか、母親の存在の代用として物を使うことができる場合のみである。(Winnicott, D.W. (1958) *From Paediatrics to psychoanalysis*, London, Hogard Press.

、子どもは自分にも他人にも自信を持つようになります（*安心小児*）。この関係が困難であったり、母親から離れている間に苦痛や恐怖を経験した場合、子どもは不安な行動をとるようになり、相手（そして他人）や自分自身に対して不信感を抱くようになるのです。

エリクソンは「基本的な自信」³¹ を語っている。Cloutier と Renaud³² は、エリクソンが提唱した人生の段階を示しながら、「ある程度の不信感、どの年齢においても、危険を予期したり、虐待や不公平な人々、罠の状況などを識別したりするのに有効である・・・しかし不信感が自信より勝ってしまうと、子供（そして後には大人）は内向的になり、フラストレーションや不信感、自信のなさなどを抱える傾向がある」と明言しています。（*op.cit.p.19*）である。

信頼とは、自分自身や他者に対する価値、信頼、信用の確立を意味します。したがって、子供が築いた最初の人間関係と結びついた一次的な信頼がある。しかし、この第一の信頼は、多かれ少なかれ、母親と自己の全能感に基づいているのに対し、信仰（自己、他者、社会、神など）は常に、与えられた言葉、信仰の表明、宣誓、契約、条約、規約に基づいている。結婚はコミットメント（「エンゲージメント」、「フィアレンセ」は「信仰を誓う」という意味）³³

.カップルの各人が経験する問題は、相手への信頼を失ったり、自分が信頼できる存在でなくなったという感覚を通じて、このコミットメントを幻のものにするのかもしれない。³⁴

.でも、信頼という子供っぽい基本に立ち返ろう！

いずれにせよ、幼児期の人間関係は、生涯を通じて私たちの態度や行動に影響を与える可能性があるという仮説です。ボウルビィは内的作業モデルという概念を提唱した。これは、子どもが自分自身や他者についてより良い認識を得るため、また自分自身の欲求を満たすため、あるいは自分自身の意図を実現するために、身近な人との相互作用を精神的に組

³⁰ Ainsworth, M.D.S. (1973) The development of infant-mother attachment, in B.M. Caldwell and H.N. Ricciuti (eds.) *Review of child development research* (vol.3), Chicago, University of Chicago Press.[1973].

³¹ Erikson, E. (1950) *Childhood and society*, New York, Norton (tr. fr. 1966 *Enfance et société*, Neuchâtel, Delachaux et Niestlé)。

³² Cloutier, R. and Renaud, A. (1990) *Child Psychology*, Gaëtan Morin, Quebec.

³³ ラテン語の *fides* の

法律的、宗教的性格は、信頼が自然ではなく、誓約（同盟、宣誓など）による同意が管理されなければならないという事実から始まっている。昨今、宣誓の重みは社会的機能においてその価値を失いがちで、人間関係、愛、貞節などを正当化することの難しさを際立たせることになりかねない。

³⁴ この問題は別のところで展開されている：Tap, P. and Oubrayrie-Roussel, N. (1999) *Personnalisation et dynamique relationnelle*を参照。A *pessoa como centro*, *Revista de estudos rogerianos*, Lisbon, n°4, 41-84.

織化することを可能にする。マリー・メイン³⁵

以降、多くの著者が、愛着行動を特徴づける安心／信頼対不安／信頼のダイナミズムに大人も関係しているという仮説を立て、検証を試みている。³⁶

。このように大人は、安心行動（言語、記憶などの一貫性、流動性）、愛着放棄行動（関係性の不整合）、夢中行動（混乱、支離滅裂、攻撃性）、非解決行動（過去、親との間で経験した困難への集中...）があり得るのである。

主体（子どもや大人）が安全な位置にいるとき、彼または彼女は、この分離を関係契約の違反として経験することなく、彼または彼女が他人や自分自身に対して持っている信頼を疑問視することなく、分離することができます。愛着理論家は、安全な基盤は、信頼を促進することによって、フィールドを取る能力、愛着人物に背を向けて探検、冒険に出発する能力も促進するという主要な仮説から出発します（二三歳の子供を例にとって）。愛着は、将来の自律行動の支えとなり、物や状況に集中できるようになるのです。しかし、子ども（そして後には大人）は、「他者との接触を促し、他者との近接性を維持するために可能な限りのことをする限りにおいて、自分の愛着における行為者である」³⁷。

愛着からレジリエンス、コーピングへ

³⁵ Main, M., Kaplan, N. and Cassidy, J. (1985) Security in infancy, childhood and adulthood: a move to the level of representation, in I. (幼児期、児童期、成人期における安全保障：表象レベルへの移行)。ブレザートン、E.ウォーターズ（編）愛着理論と研究の成長点。また、Main, M. (1990) Cross-cultural studies, changing methodologies, and concept of conditional strategies.参照。人間開発、バーゼル、カルガーAG、No.33、48-61。Marie Mainは、成人の愛着行動を分析するためのインタビューモデル（AAI: Adult Attachment Interview）を開発しました。

³⁶ Blaise Pierrehumbert がコーディネートしたスイスのチームの仕事を参照すると、特に Pierrehumbert, B. et al (1996) Les modèles de relations : développement d'un autoquestionnaire d'attachement for adultes, *Psychiatrie de l'enfant*, Paris, PUF, vol.XXXIX, fasc. 1, 161-206

³⁷ Tap, P. and Vinay, A. (1999), op.cit. p.104.

夫婦の別離や離婚といったストレスの多い状況において、愛着行動は、その人が自分を被害者と認識しているか、加害者と認識しているか、あるいはその両方であるかによって、異なる、あるいは混乱した役割を演じることになる。

- 自分が被害者であると認識すると、騙された、恥をかかされた、嫉妬している、過ちを犯した、相手が自分の愛に応えてくれないなど、管理困難な感情が生まれることがあります。また、自分らしさを否定してきた相手に復讐したいと思うことも…。
- もし、自分自身が紛争の引き金になった、あるいは責任があると認識した場合、これらの同じ幼年期の行動は、「探索」（他の行動、他の生き方や愛し方を見る）において再活性化することができ、それはまた、欲求不満や不満、他の場所で、より良く、あるいは違った形で、他の人に愛されるといった様々な感情の結果である可能性があります。

愛着は、安全な状態であれば、持ちこたえ、立ち直る力（レジリエンス）、問題と感情の両方に対処する力（コーピング）を発達させることができるだろう。しかし、幸いなことに、一人で対処することはほとんどありません。私たちは、身体的・心理的な危険にさらされる状況であれば、背を向けて対処することができますし、時にはそうしなければならないこともあります。撤退戦略は、対立する状況で感情をコントロールすることが困難な人が使う戦略です。しかし、ここでは幸いなことに、より良いリバウンドをするために手を引くということが、今でも、そしてほとんどの場合、行われているのである。

"レジリエンス

"は、適応に関心を持つという点ではコーピングと似ていますが、主にショックから立ち直る能力、生じたハンディキャップを最大限に活用する能力で定義されます。このように、状況をポジティブにし、障害をうまく利用する能力が、価値観や態度、あるいは行動として表れてくる……ということなのでしょう。このように自分の中に発見された未知の資源は、少なくとも自分の抵抗力の限界を一瞬押しとどめる。³⁸

³⁸ Boutinet, J.P. (1998) *L'immaturité de la vie adulte*, Paris, PUF.

自分らしさを再発見し、よりよく生きるための努力に再挑戦する.....そして、これまでとは違う生き方をする。

サン・テグジュペリは「人間は何らかの障害に直面しない限り、自分自身を知ることはできない」と言った。ドラマチックな状況や出来事は、ストレスや怒り、落ち込みなどを引き起こしますが、私たちの人生や死、愛し方やその難しさ、自分のアイデンティティや他者のアイデンティティについて、自問自答を強いることになるのです。それは、私たちが立ち直り、自分自身を再認識するための後押しとなります。

まさにパーソナライズ。

- それは、虐待されたり軽蔑されたりしてきたアイデンティティを常に再構築することであり、自尊心を高めることです。しかし、他人をありのままに受け入れるのであって、自分がそうなってほしいと思うように受け入れるものではありません。³⁹ .Tzvetan

Todorovは「他者を他者として認識することで、その人をよりよく愛することができる」⁴⁰

と言っているが、それはまた、迷いや孤立、罪悪感なしに、彼の前や外に存在することを意味する。人間は愛を必要とするが、同時に3種類の認識の形を必要としている：社会的、関係的、またナルシスティックな認識。後者はしばしば批判され、拒絶され、社会的に好まれず、エゴイズムや利己主義と混同されます...

しかし、私が自分自身や私が作られたものを憎んでいたら、どうして他人を愛することができるでしょう。

³⁹

サンテグジュペリも「もし私があなたと違えば、あなたを傷つけるどころか、あなたを増やすことになる」（1943年、『人質への手紙』パリ、ガリマール社）と述べている。

⁴⁰ トドロフ, T. (1984) *Une critique dialogique*, Le Débat.

- しかし、自分自身をパーソナライズすることは、断絶が落ち着きたい場所に最小限の連続性を見出すことでもある。実際、人間は不連続性を嫌う。ここで橋が崩れると、別の場所に橋をかけ直す。同一化は、移行状況に最も適応する精神プロセスである。それは、私たちが人生に刻んだ出来事に与えた意味から、人生の歴史を無限に紡ぎ直すことである。おそらく幻想的な連続性ではあるが、人生の意味、与えられたあるいは受け取った愛の現実、助けや社会的支援の正当性などがそこにかかっているため、不可欠な連続性である。;
- 自分自身をパーソナライズするということは、自分自身の断片化、行動や感情の分散が落ち着こうとするところに、やはり最小限の統一性と一貫性を見出すことである。
- これは、私たちが今日直面している、あるいは明日直面する問題に対する解決策を見出すための、個人的なストレス管理方法を説明するものです。そうすることで、対処能力を強化し、自分の可能性を最大限に生かし、疎外感や行き詰まり、解決の糸口が見えない時に、それを継続できることに誇りを持つことができるのです。
- は、社会化、新しい関係への統合、連想的な協力、援助や援助の要請のためである。
- それは、私たちがすでに持っているものと調和する新しいものに対してオープンであること、そして、自分自身を再創造するために創造することです。
- したがって、ヒロイズムに陥ることなく、私たちにとって大切な人たちの幸福と喜びを考慮しながら、私たち自身の満足、幸福と喜びの瞬間、人生における幸福の明白な現実を押し殺さないように、自己実現の方向にあるプロジェクトを開発することである、どんな損失も、経済的利益を超えて。

これらの様々な発言は、「規範的」で道德的と思われるかもしれませんが。しかし、危機的な状況が発生すると、外部規範だけでなく、自己規範の力学（⁴¹）が、基準となる一連の信念、確信、価値体系と関連して、効力を発揮する。このセットは、明らかに社会的、文化的に位置づけられるものです。

⁴¹

自律性とは、その人が自分に与えたルールに基づいて、自分の中に正当性を見出す能力にほかならない。